



CONTENTS

- 1-トピックス 関西支部活動紹介
- 2-私の提言 不確実な「初期段階」—商品企画研究の再興に向けて—
- 2-ルポルタージュ 第455回事業所見学会ルポ
- 3-第55年度 品質管理推進功労賞推薦のお願い
- 4-ルポルタージュ 第153回講演会ルポ/行事案内

発行 一般社団法人 日本品質管理学会
 東京都杉並区高円寺南1-2-1 日本科学技術連盟東高円寺ビル内
 電話.03 (5378) 1506 FAX.03 (5378) 1507
 ホームページ:www.jsqc.org/

関西支部活動紹介

《皆が共に成長し合える「学理／実践」の地域拠点を目指して》

関西支部長 阿部 賢一郎

いま日本企業の多くは、過去に類を見ない多種多様な課題に直面しています。価値基準の変化やグローバル競争の激化とともに、IOT・AIの加速的な技術進化といった激変する環境下で、私たちが積み上げてきた成功パターンへの依存は、時として足枷にもなり得る時代となっています。この「歴史的転換期」に、日本企業の強みである「品質」や「人づくり」を最大限に活かし、競争力を維持するためには、改めて変化の本質に向き合う必要があります。

その根幹を支えるのは産学の密接な連携であり、環境変化に適応するための「学理追求」と、現場での「実践・ブラッシュアップ」の両輪です。

本学会は「品質による社会貢献」という共通目的のもと、産学が共同体として品質の「確保／展開／創造」を目指す、まさにその象徴的な存在であり、創設期以降、今ほど時代変化を由来にした活動活性化や転換、継続性を問われる環境はないと感じております。

そのような中、私たち関西支部は約五百名の会員を擁しておりますが、その七割以上が産業界の第一線で「品質」と対峙されている実務家の方々です。支部運営にあたっては、この実務者の方々に寄り添い、現場に近い視点で活動を企図することを重視しています。今回は支部を支える皆様の尽力によって運営されている具体的な「活動の場」をご紹介します。

(1) QCサロン：本音と経験が交差する「実務対話」の場

支部の代名詞とも言える「QCサロン」は、講師と参加者が膝を突き合わせる小規模な講演会です。ここでは教科書的な正解ではなく、現場での「失敗談」や「苦勞の乗り越え方」といった実務家同士にしか分からない本質的な議論が行われます。代議員の皆様による熱意ある企画が、業種を超えた「本音の交流」を今も脈々と繋いでいます。

(2) 研究会活動：産学連携で「仕組み」を磨き上げる場

専門的なテーマごとに分科会化し、数か月にわたり議論を深める研究会活動は、支部の知の源泉です。統計的手法の深掘りはもとより、近年のIT活用や人材育成といった課題に対し、産・学の知恵を融合させた「実践的な解決策」を模索しています。幹事の皆様には運営という重責を担っていただいております、その成果は会員の皆様の英知を養う大きな力となっています。

(3) 講演会・シンポジウム：時代の変化を捉え「実利・課題」に置き変える場

最新の社会課題を品質管理の視点から捉え直す「講演会」。学生や企業人による多様な研究成果を交流させる「研究発表会」。そして、実践事例と学理を融合させ、気づきに繋げる「シンポジウム」。企画運営にあたる幹事・役員の皆様は、実務家が「明日から使えるヒント」を得られるよ

う、テーマ設定から講師選定まで日々知恵を絞っています。

(4) 事業所見学会：他を知り己を知ることができる「気づき」の場

関西企業の現場を訪問し、品質管理や生産性改善、人材育成の創意工夫を体感する場です。他社の「現地・現物」に触れることで、自社の客観視や改善意欲の向上に繋がっています。

結びに代えて

支部の活動を支えているのは、日々多忙な業務を抱えながらも、運営に献身的な努力を続けてくださっている代議員、幹事、役員の皆様です。この場を借りて深く感謝申し上げます。

先般行った会員様アンケートでは、「実務に活きる他社事例を知りたい」「世代を超えたネットワークが欲しい」「AI/IOT時代の品質対応課題」といったような未だ未だ答えきれていない課題やニーズを多く再認識いたしました。入会促進を含め、時代の要請に合致した取り組みを加速させていく所存です。

「関西支部に行けば、仕事や学びのヒントがある」と会員の皆様にとっての「品質管理の基地」であり続けられるよう、今後も皆様のニーズに寄り添った運営を続けてまいりますので、支部内外の方々の多くの参加（感想／ご意見）をお待ちしております。是非ともお気軽に参加をいただきたく、宜しくお願いたします。

● 私の提言 ●

不確実な「初期段階」を科学する
—商品企画研究の再興に向けて—

日本文理大学 経営経済学部 小久保 雄介

企業が持続的に成長を遂げるためには、絶え間ない新製品・サービスの創出が不可欠である。このプロセスの入り口を担う「商品企画」という領域は、かつて日本において「商品企画七つ道具 (P7)」として世界に類例を見ない形で体系化され、実務で広く活用されてきた。

しかし、私が計量テキスト分析を用いて国内の製品開発関連論文を調査した結果、「商品企画」という言葉の登場頻度は1990～2000年代の隆盛期と比べて相対的に低下しており、論文数も2007年をピークに減少傾向にあることが確認された。学術的な探究はいまや実践事例や教育現場での言及に留まっており、かつての熱量は見る影もない。この「退潮」は単なる流行り廃りではなく、

研究コミュニティ全体が真剣に向き合うべき問題だと私は受け止めている。

特に深刻なのが、新製品開発の初期段階への研究の手薄さである。海外では「ファジー・フロント・エンド (FFE)」や「フロント・エンド・オブ・イノベーション (FEI)」として相応の研究蓄積があるこの領域において、国内では品質管理・経営学・マーケティングといった各分野がそれぞれの文脈で断片的に論じるにとどまり、領域をまたいだ体系的な研究知見が形成されにくい状況にあるのではないかと懸念する。顧客ニーズが高度に多様化・複雑化する現代において、この「曖昧さ」を論理的に制御可能なプロセスへと昇華させることは、日本企業の持続的な競争力に直結する喫緊の課題である。

では、何をすべきか。私が強調したのは、P7をはじめとする日本固有の商品企画手法をFFEおよびFEIと積極的に接続すべき点である。P7が扱うニーズ調査・アイデア発想・コンセプト評価といった一連のプロセスは、これらの概念が対象とする領域と本質的に重なる部分が多い。海外の概念を単に輸入するのではなく、日本の実務経験を理論として昇華させる独自の研究軸を打ち立てること、そして手法研究と実証研究を両輪として着実に積み重ねていくことを、学会内外の研究者に広く呼びかけたい。

なお、JSQCの「商品開発プロセス研究会 WG1」においても、他分野の知見を参照しながらこの議論を継続していく予定である。学際的な探究こそが、日本の価値創造を支える新たな知の基盤となると信じている。かつて品質管理分野が牽引した商品企画研究の熱量を現代に取り戻すこと、それが私の提言である。

以上よろしくお願ひ申し上げます。

第455回
事業所見学会
ルポ(株)イトーキ
関西工場

1890年の創業以来、社会の「働く」環境をデザインし続けてきたイトーキ。その先進性と働く人への想いは、主力拠点である関西工場にも貫かれていました。

約10万㎡の工場では、その技術の多様性と生産体制の柔軟性に驚かされました。例えばチェア工場では、わずか20種類の基本設計から、色・素材・機能の組み合わせにより5万通りもの製品を生産可能にしています。裁断、縫製、溶接、ウレタン成型といった多様な技術が有機的に連携し、無駄のない生産フローが構築されていました。また、高付加価値製品の少量オーダーに対応する「APセンター」では、多品種のセル生産を実現しており、あらゆる顧客ニーズに応える体制が整えられています。

一方、品質へのこだわりは揺るぎません。最終的な品質チェックは、熟練した従業員の厳しい目と手によって丁寧に行われており、テクノロジーと人の技の融合が、同社の品質を支えていることを実感しました。

特に印象的だったのは、従業員満足 (ES) が顧客

満足 (CS) の向上につながるという考え方が、現場の隅々にまで浸透している点です。従業員の意見を取り入れて作った休憩室は、街角のカフェを思わせるファッションブルな空間でした。案内してくださった管理者や現場の方々からは、自らの仕事への誇りと、より良い製品を届けたいという情熱が伝わってきました。イトーキが推進する「働き方改革」が、単なる理念ではなく、現場の活力となっていることを実感しました。

「働く」の未来を創造する同社の姿勢は、最新技術と人を大切にせる企業文化が融合しており、非常に有意義な示唆に富んでいました。

北川 昭浩 (北川技術士オフィス)



第55年度 品質管理推進功労賞

学会員の皆様 候補者の推薦をお願いいたします！

日本品質管理学会品質管理推進功労賞は、品質管理推進に尽力されている多くの方々に活力を与え、品質管理の発展がより加速され、ひいては産業界の発展に寄与できることを願って創設されました。本年度は第26回となり、次の要領で実施いたしますので、奮ってご推薦の程お願いします。但し、推薦にあたっては次の点にご配慮ください。

- 1) 本賞選考の推薦は全てEメールにてお願いします。
- 2) 推薦に際しては、予め被推薦者の了解を得て、被推薦者本人の確認を受けた書類を送付してください。

記

本賞の授賞資格（品質管理推進功労賞内規）：

以下のいずれかの条件を満たす会員とする。

- 1) 企業・各種団体（以下、組織という。）に所属し、所属組織の品質管理の実践と推進に多大な貢献をした、もしくは、していると認められる者。
- 2) 組織に所属し、本会に対する多大な貢献があった、もしくはある者。
- 3) 組織に所属し、品質管理に対する造詣が深い者。
- 4) 本会の役員2名以上の推薦があった者。

本年度選考方針：

- a. 本年度は、既に本来の所属企業を退職している人も対象として含めるものとし、表彰対象者数は、6名以内とする。
- b. 地域・社会への貢献を重視する。
- c. 本賞対象者の推薦に際しては、55～65歳位を目安とし、70歳以上ならびに50歳以下は避ける。
- d. 本来の所属企業で取締役になった人は避ける（理事、執行役員は対象とする）。但し、子会社等へ出向し役員になった方は候補者に含めて差し支えないものとする。
- e. 55年度のJSQC理事は、今年度の推薦対象者から外す。
- f. 特定の企業に属さず個人として品質管理の普及・発展に著しく貢献する活動を長年行ってきた人を含む。

評価項目：

本賞の候補者に対して、主に次の観点から評価を行う。

【A】所属組織への貢献

- a 1 TQC/TQM/標準化/QCサークル活動等の推進
- a 2 品質管理に関する表彰・認証等の受審支援
- a 3 品質保証体制の確立
- a 4 その他特筆すべき活動

【B】地域・社会への貢献

- b 1 日本品質管理学会の発展
- b 2 デミング賞委員会/品質月間/関連学会等の活動を通じた品質管理の普及・発展
- b 3 標準化推進を通じた品質管理の普及・発展
- b 4 QCサークル活動の普及・発展
- b 5 日科技連/規格協会等の関係諸団体への協力を通じた品質管理の普及・発展
- b 6 品質管理に関する国際協力
- b 7 品質管理への深い造詣に基づく著作等の活動を通じた品質管理の普及・発展
- b 8 その他特筆すべき活動

推薦必要書類：

推薦書（様式219-1）、業績リスト（様式219-2）、上司等の推薦書（様式219-3、上司等とは、元・上司、現・関連部門長を含むものとする。候補者が選考方針fの場合、上司等とは品質管理について師事する者またはそれに相当する者を含む。）

様式については、下記Webページよりダウンロードしてください。

URL：<https://jsqc.org/2026ACPQM/>

業績リスト（様式219-2）の業績については、左記の評価項目に対応した記述にしてください。

推薦締切：2026年6月30日(火)

推薦書類提出先：2026kourou@jsqc.org

選考：日本品質管理学会 品質管理推進功労賞選考委員会が行う

発表：9月に開催される本学会理事会での承認後、本人ならびに推薦者に通知

表彰：第56回 年次大会 授賞式

連絡先：日本品質管理学会事務局

参考：https://jsqc.org/ACPQM_list/

第153回 講演会 ルポ

「信頼」される学校給食づくり ～業界No.1の東洋食品が 取り組む品質管理～

2025年10月2日に開催された講演会「『信頼』される学校給食づくり～業界No.1の東洋食品が取り組む品質管理～」に参加したので、概要を報告する。講演者は、株式会社東洋食品専務取締役・工学博士の荻久保瑞穂氏である。東洋食品は、学校給食の専門企業（従業員数約17,000名、売上高460億円）であり、1966年の創業以来58年間、食中毒ゼロを継続している業界のリーダーである。

講演内容は、①自己紹介・会社案内、②学校給食の仕組み、③東洋食品の品質管理の取り組み、④人材育成、⑤学校給食業界の課題と今後の展望、であった。講演後、終了時間を30分程度延長し、活発な質疑応答がなされた。

学校給食は、戦後、欠食児童対策としてスタートしたが、現在は「食育」という教育の一環として意義づけられており、また、集団食中毒の発生（1996年）があったことから「学校給食衛生管理基準」が制定さ

れ（1997年）、厳格な衛生管理が要求されている。

また、同社は創業以来、食品安全についてはトップ以下一丸となって管理しており、食材検収から調理、配送に至るまで、工程管理を視覚化して管理するなど、厚労省のHACCP制度化にも対応し、さらに食品安全マネジメント規格であるISO 22000の認証も取得し、安全及び品質の管理に努めている。

なお、同社のメイン顧客は小中学校の生徒であり、顧客満足を高めるために定期的にアンケートを行いニーズの把握に努め、また、決められた費用のなかで美味しさを最大限引き出す調理方法を工夫し、さらに継続的な残食量調査結果から献立・調理方法の改善を図っている。

「品質は『人』が作るもの」という同社の理念を達成するためには、人材育成が鍵であり、各種研修制度の充実とキャリアアップの見える化、パートの正社員登用・女性管理職の登用を進めるなどの待遇改善を実施している。

同社は、地域貢献・海外進出にも目を向けており、また、学校給食を通じて持続可能な社会の実現を目指していることを述べ、講演を締めくくった。

亀山 嘉和（元・食品安全マネジメント協会）

行事案内

●第151回QCサロン（関西）

テーマ：商品開発における高分子材料品質は正の現場力：添加剤起因の品質トラブル事例とその課題

講演者：西野 裕暁 氏（ダイキン工業）

日時：2026年4月7日(火)19:00～20:30

会場：オンライン(Zoomミーティング)

申込締切：2026年4月7日(火)18:00

詳細・申込：<https://jsqc.org/151qcsalon/>

●第456回事業所見学会（関西）

日時：2026年4月16日(木)13:20～16:20

見学先：ダイハツインフィニアース姫路（兵庫県姫路市）

定員：30名

※同業他社のお申し込みはご遠慮ください。

申込締切：2026年4月9日(木)

詳細・申込：<https://jsqc.org/456visit/>

●第150回クオリティトーク（東日本）

テーマ：サイバーセキュリティと個人情報保護—サイバー攻撃から個人情報・重要情報を守るために—

ゲスト：畠中 伸敏 氏

（リスク戦略総合研究所）

日時：2026年4月17日(金)13:00～15:30

会場：オンライン(Zoomミーティング)

詳細・申込：<https://jsqc.org/150qtalk/>

●第151回クオリティトーク（東日本）

テーマ：品質管理視点のデータサイエンス・AI—なぜ今、品質管理でデータサイエンスなのか?—

ゲスト：和田 尚之 氏（技建開発）

日時：2026年5月14日(木)13:00～15:30

会場：オンライン(Zoomミーティング)

詳細・申込：<https://jsqc.org/151qtalk/>

●第140回研究発表会（本部）発表募集

日程：2026年5月23日(土)

会場：日本科学技術連盟・東高円寺ビル

(1)申込期限

発表申込締切：3月11日(水)

予稿原稿締切：4月20日(月)必着

参加申込締切：5月14日(木)

(2)研究発表・事例発表の申込方法

https://jsqc.org/140technical_cfp/

(3)参加申込

3月下旬にホームページにてご案内します

●第457回事業所見学会（西日本）

テーマ：「多くの人に福を広める」

～オタフクソースの取組について

日時：2026年5月27日(水)13:00～16:30

見学先：オタフクソース本社工場、Wood Egg お好み焼館（広島県広島市）

定員：30名

申込締切：2026年5月20日(水)

詳細・申込：<https://jsqc.org/457visit/>

●第23回ヤング・サマー・セミナー

日程：2026年8月5日(水)～6日(木)

会場：デンソーグローバル研修センター「AQUAWINGS」（静岡県浜松市）

参加資格：原則35才以下

詳細・申込：<https://jsqc.org/23ysss/>

事務局

JSQCホームページ：<https://jsqc.org/>